

白秋詩「月光微韻」覺書

桜井

緑

一

大正七年二月、北原白秋（三三才）は本郷動坂から小田原十字町お花畑へ移り住んだ。さらに十月には、同じ十字町の天神山伝肇寺に庫裏の一間を借りて移った。白秋がこれまでのひどい貧困から救われたのは、この小田原生活からであった。大正七年七月から、鈴木三重吉の児童雑誌『赤い鳥』で童謡の面を担当することになったのである。また「雀の生活」等の散文を雑誌『大観』に発表して好評を博したのもこの時期であった。そして翌八年夏には、伝肇寺の東側に「木兎の家」という小笠原風の草葺の小屋をたてるまでになり、さらに翌年九月には本建築の洋館を建てた。その地鎮祭の直後に、妻章子と離別するという不幸が起きた

が、それも十年には佐藤菊子との結婚によって再び幸を得るに至った。十一年には長男が誕生し、今までいろいろな点で恵まれなかった白秋の家庭生活は、漸くにして安定して来たのであった。この時代の詩を集めたものが第六詩集『水墨集』である。

「月光微韻」は、この『水墨集』に収められているものである。この作品は、大正十一年七月号の『明星』に「月光微韻」二十八章として載せられたのが初出である。『水墨集』に収められているものは、この二十八章のうちから抄出した二十一章と、それに若くして死んだ無名詩人高歟佻祐への弔詩一章を最後に加えて、二十二章としたものである。

白秋は、大正三年に第五詩集『白金之独楽』を出したあと、ほとんど詩作をしていなかった。彼はもっぱら歌作に専念して葛飾時代を過して来たのであった。ところが、大正十年十月に突然感

興が湧いて「落葉松」の詩が成ったことが動機となり、白秋は再び詩の世界へ戻って来たのである。そしてこれ以後十二年春に至るまでの作品を集めて『水墨集』としたのである。

二

「月光微韻」を作る動機については、白秋が『水墨集』巻末の解説の中で述べている。それによれば、この詩は、「十一年の六月のある夜、海の見える書斎の露台に独しずかに黙想に耽つて、何か迫り来る或る陰影と光とに驚かされて突然にこの感興が湧いて」出来上ったものである。これは主観的な解説であって、これ以上追求するよしもないが、当時精神的にも物質的にも安定した穏かな生活を送ることが出来たからこそ、このような静かな作品を生み出し得たのであろう。

この作品において問題とすべき点は、『邪宗門』・『思ひ出』時代の官能的、色彩的詩風が全く影をひそめてしまっていることと、芭蕉の影響が実に明瞭であるということである。白秋は、大正二年刊行の歌集『桐の花』の歌論の中で、「芭蕉の寂びはまだうら若い私達が落着くところではない」といつている。ところが十年後の大正十二年に刊行された歌集『雀の卵』において、「つ

くづく慕はしいのは芭蕉である」といい、更に、「風流に了らず、真に自然に還って一木一草の有るが儘におのれをその中に置くさうした自然に任せたあなたまかせの境地こそ真の芸術ではなからうか。私はその心を以つて心としつつある。」と述べているのである。これは芭蕉の「造化にしたがひ、造化に帰れ」の精神を、ある意味で踏襲しているのではなからうか。

官能と色彩の詩人として世間から注目を浴びてきた白秋が、このように、これまでは自分自身でさえはつきりと敬遠することを表明していた芭蕉の閑寂さを何故に求めるようになったのであるうか。この転換期は、ほぼ大正五年頃であろう。この年の五月、白秋は東葛飾真間の亀井坊という寺へ、江口章子と共に移り住んだ。その頃の作品「葛飾閑吟集」の「序に代へて」と題する文の中で、「閑雅、閑雅、われ汝を慕ふこと久し」と述べ、文末には芭蕉の句「うきわれを寂しがらせよ閑古鳥」が引用してあるのである。そして作品の上にも影響がみられる。これは白秋が堪え難い苦悩と焦燥の時代を経た後であった。即ち、白秋は大正二年、人妻と恋に落ちてその夫に訴えられ、未決囚として監獄へ繋がれたのであった。この事件は白秋にとって実に堪え難い打撃であった。無罪となって釈放された後も、暫くは生きて行くことに望みを失なっていた。彼は死ぬつもりで三崎へ行つたと『朱戀』^{サムボア}に書

いている。この事件を境として白秋のものの考え方は変り、詩風も変って来たのである。今までのような作風を、そのまま続けることは到底出来なかったに違いない。白秋がまず取ったものは、『白金之独楽』や、『真珠抄』に見える光明礼讃の詩風であった。この妙に光を求めていた時期が過ぎると、心が次第に沈潜に向って来て、閑寂を愛するようになって行ったのである。そしてその裏には、貧しいけれども落ちついた静かな生活があった。

三

さて、この作品における芭蕉の影響であるが、二十八章中、何らかの意味で芭蕉の句と関連を持っているものをあげてみれば、

1

月の夜の

あまはひのみぎ
羅漢 柏の

春の幽けさ

7

蝶の飛ぶ

水田 明り、

その末か、

月の夜の海。

10

月の夜に

影するものの真近さ、

花ちり方の椎の木。

15

ありありと

現はるる風、

孟宗の夜ふけの月。

22

頼むは生れしばかりの星

椎の木立

23

月の夜の

薄翅かげろふ

白芥子の

空に舞へよ。

以上のものである。これ等は、各々次にあげる芭蕉の句と結び

つきを持つように考えられる。

- 1 淋しさや花のあたりのあすならう
- 7 蝶のとぶばかり野中の日影かな
- 10 椎の花の心にも似よ木曾の旅
- 15 木枯や竹にかくれてしずまりぬ
- 22 まず頼む椎の木もあり夏木立
- 23 白芥子や時雨の花の咲きつらむ

これ等の句と前掲の六章の詩との結びつきは、その程度においては様々であり、影響とみるには穿ち過ぎと思われるものもある。1においては、羅漢柏を持ち出したところに、この句が意識下にあったと見るべきであろう。ただし羅漢柏については、枕草子においても、「木はあすは檜、（中略）何の心ありてかあすは檜とつけけん。味気なきかねごとなりや」といっているのので、芭蕉の句のみをより所と考えるわけには行かない。この1は、水墨集に載せる時に手が加えられ、「なんとなき春の幽けさ」となった。この「何となき」は、「山路きて何やらゆかしすみれ草」によったものではないかと考えられる。

7は、月の明るい夜、田にひらひらと飛ぶ蝶が夜目にも見える、そしてそのはるか遠くには海が広がっているという大きな光景を描いたものである。これは白秋が海の見える書斎の寝台に立

った時の実感とも取れるのであるが、広い野中に蝶だけが飛んでいるという情景が芭蕉の句と似通っている。しかしこの章は、月の夜にその情景をとらえた点に白秋独自のものが感じられる美しい一章である。

10、23は芭蕉の句からヒントを得て、白芥子等の素材を借用したと見てよいと思う。白秋は、芭蕉のこの椎の花の句によって椎の花に心をとめるようになったのではないだろうか。これが白秋の実感であったとしても、椎の花が彼自身の発見であったとはい切れない。白芥子の花もこれと同様であろうと思う。白芥子の持つイメージを、白秋は芭蕉から学んだのではなからうか。

15は芭蕉の句と比べると、竹藪を吹く風の把握のし方が違っている。白秋は、「ありありと現はるる風」といい、芭蕉は、「竹にかくれてしずまりぬ」といっている。しかし芭蕉の風は木枯であり、白秋の風は孟宗藪を吹く時はじめてはっきりと感じられる心よい風なのである。いずれも秀れた把握であると思う。ただ共に竹と風を歌っている点で、あるいは白秋がこの芭蕉の句に示唆を受けているのではないかと思う。

22は、最も芭蕉の句に近いものである。椎の木立を頼みとする気持をそのまま芭蕉の句から持って来ている。これは、白秋が自らの生涯を芭蕉の生涯に思いあわせてこのような表現を取ったの

ではないであろうか。しかし、白秋は椎の木立と共に、光り初めた星にも期待を感じているのであり、単なる芭蕉の追隨者ではないところを示している。

白秋が芭蕉を慕った結果、白秋は芭蕉から多くのものを得た。それは以上のようにこの詩においても明らかである。しかし白秋と芭蕉がその資質を同じくする詩人であるか否かは非常に疑問である。芭蕉は言うなれば生活派の詩人であり、彼の詩は日常の生活に深く根ざしたものであった。他方白秋は、たしかに彼も生活派詩人としての一面を持っていたが、それと同時に、豊かな想像性を兼ね備えていた。また彼の人生観も芭蕉のものとは違っていた。白秋は芭蕉よりもずっと明るくおろかな人生を楽しんでいたように思う。白秋が芭蕉から多くのものを得たと言ったが、それは表面的なものに過ぎないように思われる。即ち芭蕉は白秋に詩材を提供したに過ぎないのではなからうか。

四

ここで芭蕉を離れて、この作品を規定している二つの要素について考えてみる。

第一は、芭蕉俳諧以外の先行文学である。これは、枕草子と室

町小歌であると考えられる。枕草子に関しては、

3

露けきは

月の夜、

竹の根の竹煮草の葉。

4

星よりも

ほのかなものは、

みどり児のはほゑみ

ついたち二日の月。

25

寒きは

孟宗原の新月

残り陽のあし。

等における、「露けきは」、「星よりもほのかなものは」、「寒きは」という表現方法が、枕草子の特有の表現方法から来していると考えられるのである。また内容の点では、先に述べた1が関連を持っている他、右にあげた4が、枕草子の

月ありあけのひむがしの山ぎはに、ほそくて出づるほいとあはれなり。

と通ずる所を持つと思う。

室町小歌に関しては、

6

月の夜の千鳥

見えて啼けとの、

27

月の夜の榎

かやの実が青う附くかよ。

等の小唄風のもの表現法には、狂言小歌の、

面白の海道下りや、(中略)加茂川白河打ち渡り、思ふ人には栗田口とよ。四の宮川原十禅寺、関山三里をうちすぎて、人松本に着くとの、(後略)

や、また、室町小歌の、

十七八は二度候か、枯木に花が咲き候かよの。

十五夜の月は宵々曇れ、暁牙えよ殿御房そよの。

等における、「かよの」「とよ」等の影響があるものと見てよいであろう。白秋は閑吟集を愛読していたので、そこから得たものと考えられる。

第二の要素として考えられるのは、白秋自らの身边にあるものに対する愛情である。この作品は先行文学の影響も多いのである

が、その反面、白秋の愛している身近の事柄を歌っているものも多いのである。この点では生活派の詩人として芭蕉に近いものを感じる。先にあげた4においては、星よりもほのかなものとしてみどり児のはほえみをあげている点に、この年の三月に誕生した長男隆太郎を愛する気持ちが窺はれてほほえましい。また白秋は、彼の住み家伝肇寺の孟宗藪が非常に気にいっていたようである。この作品の中でも、

3

露けきは

月の夜、

竹の根の竹煮草の葉。

15

ありありと

現はるる風、

孟宗の夜ふけの月。

16

そよかぜにも

堪へぬは小竹、
ささ

月の夜の雀。

25

寒きは

孟宗原の新月、

残り陽のあし。

等に歌っているのである。また、

11

月消れて氣深きもの

一本の榧

その空の

こぬかの星。

27

月夜の榧、

かやの実が青う附くかよ。

に歌っている榧は、伝肇寺の墓地にある一本の古い榧の木なのである。白秋は、あまり人の来ないところに立つその榧の古木を一人の友であるかのように愛していた。彼の散文詩集『観相の秋』の中の散文詩「榧と栗」によって、この事柄がわかるのである。

さらに、水墨集が篇まれた時に附加された弔詩、

風高し、あはれ、

影無うして、月に開く窗。

は、先にも記したように無名詩人高鋤佻祐の死をいたんで作った

ものである『月に開く窗』は佻祐の詩集名であり、大正十一年八月に発行されたもので、白秋の序が添えてある。白秋は、「月光微韻」を解説した中で、「かの未知の年少詩人と私との交霊関係については、十一年十月号の『詩と音楽』に委しくかいた」と記している。「詩と音楽」を手にすることが出来なかったので詳しいことは不明であるが、この文により、白秋が未だ会ったことのない、しかし文通か何かで特に親しい間柄であった若い詩人であることが知られる。この一章は、詩集名『月に開く窗』を巧みに読み込んでいて、しかも無き人を忍ぶ思いがこめられた秀れた弔詩である。

このように、この作品は、生活に根をおろしたものを多く持っていて、しかもそこには白秋の静かな愛情がこめられているのである。白秋の心身共に安定した生活を測り知ることが出来る。

五

これら二十八章の詩は、各々独立したものではあるが、「月光微韻」という題が示すように、全て月の夜のはのかなもの、かななものを追求めし表現したものである。それ故、全体に漂う詩情はほぼ統一されて、全体としての調和の美しさを備えている。し

かし全章が成功しているとは言えない。

12

月かげすらも

痛からむ

明日咲く蓮の

蕾の尖

17

月の夜の

見えの薄さ、

風の吹く道、

星の間の線。

等は、表現の面白味にとられて技巧が勝ちすぎ詩情が乏しい。

また詩型を短くする事に努力したために、短詩としてのよさを出し成功しているものも多いが、その反面言葉たらずに落ち入り、

主観的な傾向を生じ解釈が困難なもの、例えば、

8

近くて遠い月の夜の野火、

ほのぼの別れ。

13

月の夜の虹

馬追の声ばかり

いま、さ青なる、

等がそれである。また単なる説明に終ってしまい、詩としての深みを備えていないものとしては、

2

月の夜の

煙草のけむり

匂のみ

紫なる。

や、先にあげた3がある。しかし、大半は好句である。特に、4、7、10、25等は秀れていると思う。

さて、水墨集におけるこの作品の位置であるが、この作品のよう短詩を一つの題のもとに多く集めた型は、他に例がない。従って詩型の点ではごく特殊なもので、その点で意味があるのである。ただ白秋がこの詩の前文で述べているように、「月の光の消なば消ぬかの幽けさ」を歌わんとし、また「形のあはれに短くほのかなるは、心の幽かなるによる」といっているように、いわゆる東洋的象徴の幽玄の世界を描こうとした非常に野心的なものであったと云える。この白秋の意図は、ほぼ達せられていると見てよいであろう。ただ難点を付け加えるならば、この詩型は、ど

れも自由にのびのびとしてはいるが、白秋にとって少し短かすぎるのではないであろうか。白秋にはもう少し長い詩型、といっても邪宗門時代のような息の長いものよりは短いのであるが、その方が性にあっていのではないかと思う。この「月光微韻」においても、比較的長い詩型に多いものが多い。水墨集の中では「雪後」「冬至前後」「老子」「雀よ」等がいずれもしみじみとした静けさと明るさを持っていて、白秋独自のよさを示しているのであるが、これらはいずれも「月光微韻」よりも長い詩型である。

白秋は、俳句をほとんど作っていない。戯れの程度で僅かに作っているようであるが、それは評価に値するものではない。白秋の抒情性は俳句に適さないものであったに違いない。白秋自身がそれを認識していたために、俳句を本格的に作らなかったと考えてもよいであろう。そして短歌の抒情性が彼にぴったりと合うために、白秋は多く短歌を作り、晩年には短歌に専心したのである。白秋が成功し得る最短の詩型は短歌であり、それ以上短いものは白秋の本来のよさを十分に発揮できないと見るべきであろう。